第1部　エッセイ

テーマ「おむすび」

一般の部

常田富士男賞

あたたか想いがつまったおむすび

秋本美佐子

わたしには忘れられない、おむすびの思い出があります。お弁当箱に二つのおむすび。ひとつは三角形の海苔むすび。もうひとつはそぼろの昆布を巻いた丸いおむすび。思わずかわいいと声が出ました。食べるのがもったいないようなおむすびを作ってくれたのは二人の娘たちです。

三十八年前看護師のわたしは週に一回、日勤当直という勤務をしていました。午前八時半から翌日の九時迄仕事。子供たちとは二十四時間会えません。

長女が小学六年生。二女が四年生。夏休みの夕暮れ時外来で片づけをしていると電話が鳴りました。

「面会の方ですよ」（患者さんじゃなくて面会者。誰だろう）と首をかしげていると駆けてくる足音。わたしが待ち合い室のカーテンを開けたのと、娘たちが顔をのぞかせたのが同時でした。

「どうしたの、こんな時間に」

わたしが驚いたように言うと「お弁当持ってきたよ。おいしいよ」と二女がにこにこしながら、赤いドット模様のハンカチでくるんだ四角い包みを差し出しました。

「お弁当を、うれしいわ」

わたしは休憩室に足走に入って、包みをほどきました。おむすびを目にしたとたん、「すごい。二人が作ってくれたのね」と声をあげました。二つのおむすびはきちんと並んで、こんにちは。とほほえんでいるようです。

「食べていいよ」顔をのぞきこむ娘たち。ひとくち口に入れて「うん、。おいしいよ」と言ったとたん涙がこみあげました。

「お父さんが持っていってあげなさいと言ったんだよ」

「ありがとうね」声がかすれています。子供たちに会えるのは翌日なので、母親と娘が触れ合えるように夫は計らってくれたのでしょう。

一年間おむすびを持ってきてくれました。あたたかい想いがいっぱいつまったおむすびはわたしたちを結んでくれた宝物です。